

急成長するソフトウェアロボットはどこまで普及するか RPA製品の違いと選定のコツ(1)



RPA選定前には業務の洗い出しが必須

今回はRPAが一体何なのか、そしてなぜ普及が加速しているのかについて触れました。今回の内容は、よりRPA製品を検討しようとしている人向きになります。RPA製品は海外製、国産を合わせると30種類以上になりますが、導入数が多いなどで絞ると主要なもの10種類前後になります(ここではRPAベンダー(代理店などを含む)の数ではなく、製品の数です)。実際に導入を考えている人にとっては、これらの製品にどのような違いがあるのか、どれが自社に合っているかは一番気になる場所ですが、その前に製品を決める根拠について触れておきます。

選定の際に必ず行うのが、対象業務の洗い出しです。洗い出しの際には導入規模と対象業務量がポイントになってきます。どの部門(部署)で、何人がどれだけの時間、業務を行うかということです。単純に考えれば、(作業人数)×(頻度)×(一回あたりの作業時間)が大きいほど自動化したときの恩恵が大きいこととなります。また、RPAは原則として「判断のルール」と「手順」が決まっている作業しか自動化できませんが、ときには一連の業務すべてを自動化せず一部を人の手で行う場合もあります。そのため、洗い出しの段階で自動化できないから対象外とすることは早計かもしれません。RPAに代替させるために、現行の業務を変えることも考えられます。例えば、いままで独自の臨機応変な判断で行ってきた業務も、実は標準化が可能で利用対象となるかもしれません。また、導入をきっかけとして、業務のムダを見直すことにもつながるかもしれません。

こういった業務の洗い出しをすることで、問題が明らかになり、課題を達成するための製品探しに移ることができます。ベンダーに問い合わせれば、どのような業務の自動化をお考えですかと必ず聞かれます。ここでの洗い出しを含めたコンサルティングを売りにしているところもありますが、ベンダーも自社の製品が必ずフィットするとは考えていないので、ある程度検討をつけてもらえると話ははやく進みます。

RPA製品選定のための3本柱

私が自社に合った製品選びで大事だと考えるのは、身の丈にあっているかです。つまり、必要の無い過剰な機能が多いと失敗につながる可能性が大きいということです。対象業務を自動化でき、費用対効果が最大

限に発揮される製品が一番いいはずですが、では実際にRPA製品の違いについて触れていきますが、大きく分けると「動作環境」、「自動化するシステムへの対応」、「設定・操作性」の3つと言えます。他にも、「価格」は最終的な判断に関わる非常に大事な項目ですが、前の3要素によって価格帯が決まってくるのでここでは含めていません。

動作環境によるRPA製品の違い

まず動作環境ですが、これは「デスクトップ型」と「サーバー型」に分かれます。デスクトップ型は個々のRPAを個人のパソコンにインストールして使うものです。WinActor(ウィンアクター)、UiPath(ユーアイパス)などはこれにあたります。サーバー型はRPAをサーバーにインストールし、作成と管理を集中して行うものです。個々のパソコンに指示を出し、実行される形式になります。BizRobo!(ビズロボ)、Automation Anywhere(オートメーション エニウェア)、Blue Prism(ブループリズム)はこれにあたります。また、WinActorとUiPathもサーバー型に対応しているものがあります。

デスクトップ型はパソコン1台からの導入が可能であるため、比較的導入規模が小さい、または検証などでスモールスタートがいいという場合に向きます。他に初期費用が安いことも大きな特徴です。ただし、前提として個々のパソコンへのインストールなので、製品によっては対応していないOSがある、処理速度がパソコンのスペックによることには注意が必要です。

サーバー型は導入の際にサーバーといくつかのPCのセットで考えるので、システム部門が主導するなど計画的な実行が不可欠になります。手間と費用がかかる分、比較的導入規模が大きい場合に向きます。また、運用管理面からもサーバー型は推奨できます。規模が大きいのに、デスクトップ型で社員各人が独自に業務自動化ロボットをつくったために、数が膨大になり管理が行きとどかないものが増えてしまう例がまま見られます。これでは仮に自動化フローが間違っていたとしても気づくことができません。他にも大量の処理を行う場合や、PC内で完結する作業をこえた連携を行う場合に向きます。例えば人の操作を介さないデータ収集・分析などです。

(次回へ続く)